



下木ノイル
PAPER
No.1

topofil paper no.1

特集 | 花見 2.0

section 1

花見 2.0 対談

てらまっと+ワクテカ

小田原のどか、佐々木友輔、平嶺林太郎。3人のアーティストによるセルフパブリッシングレーベル・トポフィル。私たちはこれまで、それぞれの立場から各々の方法で「場所」についての思考を巡らせ、その思索のドキュメントを書籍として出版して参りました。フリーウェブマガジン・トポフィルペーパーでは、トポフィルとは異なる視座からの「場所」への試みをとりあげます。今回お届けするトポフィルペーパー第一号の特集は、週末研（週末思想研究会）によって企てられた《花見 2.0》。《花見 2.0》とはどのような意図から起こったものだったのか。週末研のお二人の対談から、彼らの「場所」への眼差しが浮かびあがります。

対談 | 花見 2・0

つらまつと

去る二〇二二年四月七日・八日、都内各所でカートに桜の植木や切り枝、造花を積み込み、あるいは桜の「木ぐるみ」を着て練り歩く、あやしげな集団が目撃されました。彼らは《花見 2・0》モバイル桜の名所」と書かれたピンクのフライヤーを誇らしげに掲げ、巨大なラジカセで陽気な音楽を流しながら、通り過ぎる人々に「ああ、春だからしかたないな…」という生暖かい視線を送られていたそうです。

さて、今回はそんなよくわからない企画を主催した「週末思想研究会」こと「週末研」の二人（ワケテカ&てらまつと）で、《花見 2・0》の可能性について徹底的に語っていきたいと思います。ワケテカさん、どうぞよろしくお願ひします。

ワケテカ

よろしくお願ひします。

《花見 2・0》——公共性・パフォーマンスアート・震災・キャラクター

つらまつと

まずは《花見 2・0》って何？という真つ当な疑問からはじめましょう。

《花見 2・0》という名称は、ティム・オライリーが提唱した有名な「web 2・0」や「government 2・0」にならって——必ずしもネットワークやデータベースによるものではないですが——「パージョンアップされた花見」を意味しています。ではどこがパージョンアップされているかというと、通常の花見が桜の木の下で行われるのに対して、《花見 2・0》は桜のない場所で行われるという大きなちがいがあられるわけです。

ここで簡単に当日の流れを振り返っておくと、《花見 2・0》は四月七日（土）と四月八日（日）の二日間に分けて行われました。詳しくは当日のタイムテーブルを見てもらうとして、七日はカートに桜の植木を積んで、電車で下北沢駅から渋谷駅へ、さらには徒歩で代々木公園に移動し、八日は桜のない秋葉原公園で、アニメ「ハートキャッチプリキュア」の主人公キュアプロツサムを桜に見立てて花見をする。これが《花見 2・0》の大まかなスケジュールでした。

問題はなぜそんなことをしたのか、桜のない場所で見るといふ行為にどんな意味があるのか、ということですよ。そしてこの問いに関しては、いくつかの異なった説明の仕方がありうろと思います。というのも僕の考えでは、《花見 2・0》はさまざまな文脈が立体的に交差し、重なり合う場所に位置しているからです。だからこそ「二日目」と「三日目」では、微妙に方向性が異なっている。それはもしかしたら、ワケテカさんと僕の好みがちがいを反映しているのかもしれないですね。

そこで《花見 2・0》の文脈を大まかに四つに分けてみました。公共性・パフォーマンスアート・震災・キャラクターです。実は先日「コンセプトを自分で説明するのはグサイ」と友人に言われて少し落ち込んでいるのですが（笑）、とはいえそうなるも誰も語ってくれないので、ひとまずこの四つのポイントに注目して《花見 2・0》を切り取ってみたいと思います。

《花見 2・0》の出発点にあるのは、ワケテカさんの「人文サロン構想」でしたよね。そこには都市における公共性という一貫した問題意識があると思うのですが、それは今回の《花見 2・0》とどのように関係しているのでしょうか。あるいは公/私の区別を問い直すようなパフォーマンスアートへの関心も、やはり公共性や場所性の問題と結びついていると考えていいのでしょうか。

ワケテカ

ありがとうございます。てらまつとさんが話してくださいったように、《花見 2・0》の発端は、自分がサロンのような場所を都市の中に作りたいという構想を「Twitter」で語り、それにてらまつとさんが乗ってくださったことから始まったんですね。今年の一月くらいのことだったでしょうか。サロンのような場を目指したきっかけは、当時シェアハウスや渋谷などに注目していたことなども背景にあります。Twitter を始めてから何度か経験したオフ会や、昨年てらまつとさんに誘われて行った拝借景での体験も大きかったように思います。そこには大きく二つの志向があって、一つ目は（無機質な言い方をすると）「知や芸術的な創造性は集まる場所を作って交流させた方が生産性が高い」というもの。もう一つは、（孤独死の問題などを背景に）「人々が集まって住む方法を再創造しなければならぬ」というもの。非常に大雑把に言うところの二つでした。後は単純に「楽しそうだった」ということですね。

でも都市の中に、例えば喫茶店のような形で場所を作ろうとすれば大変なコストがかかる。最大のネツ



花見 2・0 フライヤー



桜の木ぐるみ



移動する桜の名所

拝借景
茨城県取手市に在する、若いアーティスト達が借家を改装してつくったアートスペース。公式サイト: <http://hatsuyaku.jp/>

■「花見 2・0」モバイル桜の名所 二日目（4月8日）
(<http://ogeter.com/>)
(<http://ogeter.com/>)
#288242

■「花見 2・0」モバイル桜の名所「タイムテーブル」
(<http://weevie.com/event/4763>)

クは賃借料、つまり土地代です。また、シェアハウスのような形も検討しましたが、もっと喫茶店のよう
に気軽に出入りできる場所が望ましかった。メンバーが固定して閉鎖性を産む恐れがあったからです。
そこで、土地代もかからず、集まって解散したらそれっきりの屋外、例えば路上や公園で、一時的に人々
の集まる場所を作り出すことを考えました。その際、ただ集まるうというだけでは意味がないし、現実
問題として人が集まらないと思つたので、何か集まるためのシンボルや口実みたいなものを持たせるこ
とが有効だと考え、とりあえず「花見か何かを開こう」ということになった。

しかし、どうせならただの花見ではなく変わった花見をしようということになり、諸事情によりポツ
になったものも含め、てらまつとさんやたけくらさん (@takahsan) 、画家の杉本克哉さん (@Sckas) と
色々集まってアイデアを出し合ったのですが、その中で「桜を持ち運んで移動しながら花見」と「桜
以外のものを桜に見立てて花見の二つが「キター」という感じだったんですね(笑)のちに前者を「モ
バイル桜の名所」と名付けることになりましたが、プライベートに設置した桜(のある場所)を持ち運び、
それを名所としてパブリックに開くというコンセプトは、坂口恭平さんのモバイルハウスやモバイルガー
デン、あるいはプライベートパブリックという概念からアイデアを拝借しています。

なぜ花見をするのか?——3.11以後、花見をするとはどういうことか?

てらまつと

坂口さんの影響は非常に大きいですよ。震災後、すぐに熊本に移住して自ら新政府(一)を立ち上げ、
内閣総理大臣に就任するという彼の行動力とアイデア、カリスマ性はすごいと思います。実はワケテカ
さんも《花見2・0》の後、新政府花見大臣に就任しているんですよ。

ワケテカ

はい、そうなんです(笑)。それで結局、モバイル桜の名所⇨カートに乗せた植木鉢の桜を運んでゲ
リラ花見をしよう、ということになったのですが、これを路上でやるには勇気がいるなど思った。その
時心の支えになったのは、何人かの先人によるパフォーマンスアートでした。例えば秋山祐徳太子さん
は、一九六〇年代以降、グリコの広告のランナーに扮して銀座の街中を走るというパフォーマンスを行っ
たりして、一連のパフォーマンスは「ポップ・ハプニング」等と呼ばれた。また最近では作家の中沢健
さんが、頭に「動く待ち合わせ場所」という貼り紙を貼り、文字通り自らが「動く場所」になって京王
線に出没したりしていました(この「動く場所」という発想の衝撃が、「花見の場所を持ち運ぶ」という
アイデアに直接影響しているかもしれません)。彼らの身体を張ったパフォーマンスは、普通は公共空間
でしないような振る舞いをするので、私達が空間について盲目的に自明のものとしている前提を問い
返す行為だと思います。言い方を変えれば、「公共空間」の条件を問い、「やっつていいこと」
⇨「自由」を拡張しようとする行為だとも思います。冗談だと思われるかもしれませんが。

また元々、建築家の藤村龍至さんが言うような外部空間(例…広場や街路)に許されている用途が日
本の都市(特に東京)においては狭くて不自由じゃないかという不満があったので、そこから、「本
来は桜のある場所で行か行わない花見を桜の無い場所で行ったら面白いんじゃないか」という思い付き
が生まれたのです。

さて、こうして生まれた「花見の常識を揺さぶる」という方向性の上で、「そもそも日本人にとって花
見とは何なのか?」、そして、「3.11以後、花見をするとはどういうことか?」という問いへと繋がって
いき、《花見2・0》のもう一つの主要なコンセプトが導かれていったように思います。そのあたりに
ついて、てらまつとさんに話してもらえますか。

てらまつと

そうですね、少し長くなりますが、「花見の常識を揺さぶる」ということは、すなわち「なぜ花見をす
るのか」と自問することからはじまります。僕たちはなぜ花見をするのか。それはもちろん楽しいから
ですよ。だからこそ日本人は毎年春になると、桜の木の下にビニールシートを広げて、家族や恋人、
友人、同僚とお酒を飲んだりご飯を食べたり、どっちゃん騒ぎを繰り広げるわけです。それどころか花
見をすること、花見を楽しむことは、あまりにも自然に私たちの生活習慣に溶けこんでいるので、たと
えばビール片手の若者をつかまえて「あなたはなぜ花見をするのか」などと真面目に質問しようものなら、
良くて可哀想な目で見られるか、悪ければ桜の木の下に埋められてしまっしょう。桜前線の北上に心
躍らせて、気象庁の開花情報を心待ちにし、そして週末の天気に一喜一憂する——ちよど桜の木が大抵
に根づいているように、花見は日本人の生活に深く根を張っていたのです。

しかしあの震災の後、僕たちは「なぜ花見をするのか」という問いに否応なく向き合うことになりまし
た。ネットでも大きな話題になりましたが、東京都知事の石原慎太郎が花見の自粛を要請したからです。
東北が震災で苦しんでいるときに、東京で花見を楽しむなんてけしからん、というわけですね。ある意
味で非常に石原都知事らしい、このような主張に対しては、すぐに多くの批判や反論が寄せられ、結果
的に東京で花見ができなくなるということはありませんでした。しかしそうだとすると、都知事の発言

坂口恭平 [1978]
熊本県出身。3.11を
きっかけに東京から熊
本に移り住み、ゼロセ
ンターと名づけた拠点
において活動。坂口恭
平(ゼロ)から始める都
市型狩猟採集生活(太
田出版、二〇一〇年)、『
独立国家のつくりかた』(講談社、二〇二二
年)

秋山祐徳太子 [1935]
東京出身の現代美術家。
一九六五年岐阜アンデ
パンダン展に自分自身
を出品。これ以後「マ
リリン」をはじめ、ポッ
プ・ハプニングと称する
パフォーマンスを展開。
七〇年代に東京都知事
選に出馬。

中沢健 [1981]
茨城県出身の作家、脚
本家。二〇〇九年十一
月『初恋芸人』で長編
小説デビュー。自作の
小説やイラストの書か
れた本や雑誌と呼ばれ
る張り紙を貼り付け、
そのスタイルを普段着
としている。ウルトラ
ソーン脚本担当。

藤村龍至 [1976]
東京都出身の建築設
計事務所を主宰し設
計活動を行うたわ
ぶ ART およ
び TEAM ROUNDABOUT
のウェブマガジン ART
and ARCHITECTURE
REVIEW を立ち上げ
る。



モバイル桜の名所

がこれほど大きな反発を招いたのは——僕は別に彼の味方をするつもりはありませんが——、そこにいくらかの不都合な真実が含まれていたからではないでしょうか。つまり、誰もが震災直後の重苦しい緊張感からの解放を求めていた一方で、花見を楽しむことに対する後ろめたさを抱えていたのではないかと、いうことです。

たとえば石原都知事への反論のなかには、東京で消費して経済を回すことが東北の復興につながる、という意見がありました。これは一見もつともらしいように思えますが（そして実際正しいのかもしれない）、そもそもこんなに回りくどい説明が必要とされる時点で、「なぜ花見をするのか」という問いかけの意味が決定的に変質していることは明らかです。なぜなら「東北の復興支援」という大義名分は、ただ「楽しいから」花見をすることへのためらいや、後ろめたさの上に掲げられているのですから（その点でこの主張は、都知事とまったく同じ前提に立っています）。

実際、昨年の花見を特徴づけるものがあるとすれば、それは復興支援というよりも、むしろセラピー的な側面が強かったように思います。まるで何ごともなかったように咲き誇る桜の木の下で、人々はお互いの無事を確認し合い、一緒に飲んだり食べたりすることで不安や怖れをやり過ごす。そこにあるのは東の間の休息であり、過酷な現実から一時的に僕たちを保護してくれる、いわばピンク色のシエルターのようなものです。批評家の東浩紀さんは、震災によって人々がばらばらになってしまった——より正確には、ばらばらだったことが明らかになってしまった——ことを指摘していますが、そうだとすれば花見は、分断された「僕たち」をもう一度縫合し、桜のイメージと結びついた「日本（人）」という想像の共同体を再構築する役割を果たしていたのかもしれない。

僕はそのことが悪いとは思いません。けれども震災から一年が過ぎ、被災地の瓦礫処理や原発事故の問題がしだいに日常へと埋没するにつれて、昨年と同じような花見を繰り返すことはできないと感じました。あのときあらわになった断絶や格差をピンクに塗りつぶして見えなくするのはなく、私たちが「ばらばらになってしまった」ことを前提に、新しい花見のかたちを考える必要があるのではないかと思っただけです。そのとき念頭にあったのは、地震や津波、放射能汚染によって故郷を追われ、「ディアスポラ」「離散」状況にある人々でした。僕は彼らに自分自身の未来を、さらには日本の未来を重ねていました。最悪の未来予測を信じるなら、遠からず日本は再び大地震に襲われ、少子化で年金制度が破綻し、増税と移民の受け入れに踏み切らざるをえなくなる。すぐにギリシヤのような状況になるとは思いませんが、あまり明るい未来を思い描けない僕としては、震災によるディアスポラがともリアルに感じられました。

モバイル桜の名所——日本を持ち運び可能にする

ワケテカ

去年の暮れ頃には、そういったシビアナ未来を絶望するでもなく、ある意味前向きに積極的捉えていこうということで、「明るいディアスポラ」というテーマで同人誌を作ろうという話も出しましたよね。結局色々あって頓挫してしまいました。

ついでに

そうなんですよ、だからワケテカさんが「桜の植木をもって移動し、桜のない場所で花見をする」という《花見2・0》のアイデアを出してくれたとき、自分のなかでくすぶっていたさまざまな問題意識がひとつにつながったような気がしました。それは花見を問い直すことであると同時に、あるいはそれ以上に、日本を問い直すことでもあるからです。桜を大地から切り離して持ち運び可能にするということは、日本を国土から切り離して持ち運び可能にすること、つまりディアスポラ状況にある日本人や日本的なもののアイデンティティを問うことにつながります。

とはいえ僕は、そこで「真正」な日本とか「本物」の日本とかいったような、時代錯誤的な幻想を呼び出してはならないと考えました。現実的な差異や格差を抹消することで仮構された共同体としての日本ではなく、たとえば外国のあやしげな日本食レストランのように、世界中に拡散・混入・屈折・乱反射する可塑性で可変的な日本（のようなもの）。桜の植木にプラスチックの造花を混ぜたのはこれが理由ですが、しかしそれ以上に、ワケテカさんの「桜／さくら／サクラ」という名前のキャラクターを桜の木に見立てて花見をする」というアイデアは革新的だったと思います。というのも、いまやアニメやマンガ、ゲームのキャラクターたちは、地理的・物理的限界を軽々と越えて世界中に浸透し、現地の言葉に吹き替えられ、あるいはn次創作的に変形させられて、日本的なものを絶えず書き換え続けているからです。

さらに桜とキャラクターには無視できない共通点があって、ソメイヨシノという最もポピュラーな品種は、まるでキャラクターのように「複製（クローン）」によって増殖するんですよね。明治以降、日本全国に植えられた大量のソメイヨシノは、ほとんどすべて単一種のクローンであることが知られています。そういうえば、「ソメイヨシノ」という美少女キャラクターを作ろうという話もありましたね。そのときふと思いついたのは、数年前にスペインに旅行した友人が、現地の少年と『るろうに剣心』の話題で盛り上がったという土産話でした。いわゆる「クールジャパン」的なものをどう評価するかは別にして、



モバイル桜の名所 造花

日本のアニメやマンガといった文化が世界各地に広まっていることはたしかです。そうだとすれば、いつか日本が沈没し、桜のない遠い異国に移住することを強いられたとしても、桜にまつわるキャラクターを通じて花見をすることができるのではないかと。あるいはそこに日本人がひとりもいなくても、それはたしかにひとつの日本なのではないか——そんなことを妄想していました。桜に見立てるキャラクターとして『ハートキャッチプリキュア!』のキュアプロッサムを選んだのは、単純に僕の好みによるところが大きいわけですが(笑)

不気味な空間に住まうこと——住まい・生き方の再構築

ワケテカ

先ほどは詳しく話さなかった「桜以外のものを桜に見立てて花見をする」というコンセプトの部分です。

自分も話が長くなりますが、「桜/さくら/サクラ」のアイデア(この案は結局そのままの形では実現していません)を口にした動機には、「サクラ」という言葉の共通項だけで乱暴にキャラクターを拾い上げることで、キャラクターの背後にある、キャラクターに関する情報の膨大な集積(東浩紀さんに倣って「データベース」と呼んでもいいのですが)を浮かび上がらせることができるのではないかと、思っていたからです。なぜそんなことがしたかったかというと、フィギュアや個々のキャラクターの背後にある私達の集合的な記憶を意識に上らせることが、花見という日本の(無意識的な)風習の意味を問い返す狙いとシンクロすると思ったからです。

終わりのない消費の果てに、キャラクターの要素が際限も無く積み上がって廃墟のようになっていくイメージというのは——てらまっとさんが『セカンドアフターさ』に寄稿した「ツイントールの天使——キャラクター・救済・アレゴリー」という文章で論じているように)——どこかこの世の「終わり」を予感させるものです。それはまた、例えば私達が災害や環境汚染、侵略等で国土を失った時に——あるいは「日本人」が減じた時に——日本という国が生み出した文化として残るものは何か、という問題を考えさせるものだとも思います。一方同時に、キャラクターが要素に分解され変形されうろことは、

てらまっとさんも言うように、キャラクターやその要素が世界に拡散していき、不特定の誰かによってn次的に再創造され続けていくというポジティブな条件でもあるわけですね。

32)以後、多くの日本人が自己自身の死や日本(人)の滅亡という事態に想像を巡らせたと思うのですが、自分自身も「日本(人)が減じあるいはディアスポラ状態になった時、それでも残る(日本(人)的なもの)とは果たして何だろうか?」という問いに対する関心を一層強くしました。その時に自分が捕らわれていた妄念が、「人間が減じた後もキャラクターは生き残り続ける」というものでした(酷くベシミスティックで「電波」な思考かもしれませんが)。だから、「キャラクターで花見をする」という思い付きをてらまっとさんがディアスポラの問題と結び付けてくれた時は、驚くと同時に、凄く腑に落ちるところがあったわけです。

ここでもう一度、サロン構想やケリラ花見の話に戻り、さらにもう一つ異なる背景についても話させてください。冒頭で拝借景の話をしたのですが、今思えば拝借景を訪れた後にてらまっとさんが書いた「借りる、住まう、考える・拝借景と住むこと」の『The Day After Yesterday』(http://shinano.jp/tenant/20110629/130936426)▼「借りる、住まう、考える・拝借景と住むこと」の『The Day After Yesterday』(http://shinano.jp/tenant/20110629/130936426)

地震と津波で沢山の家屋が流され、放射能汚染で人々が住み慣れた家や土地を手放して避難しなければならぬような状況が生まれ、また、比較的被害が少なかったと思われている東京のような大都市においても、原子力発電に代表される巨大なインフラへの依存に疑問が向けられ、多くの人が住まいや生き方を根本的に再構築しなければならぬと考えているところだと思えます。また、大災害が起こった時、家や公共交通機関のようなインフラが壊れた状況でどうやって集まって協力し合って生きていくかという知恵と技術を、多分ほとんどの人々は知りません(関東大震災はもはや余りにも遠い過去の出来事ですし、レベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』が報告しているような、災害時に人々が連帯を発揮するというモデルがそのまま日本にあてはまるかどうかは自分は疑問です)。

さらには、災害時に限られない空間の荒廃の問題というのもあります。団地が過疎化して限界集落のようになっていたり(都心のタワーマンションはそれと同じかもっと悲惨な末路を辿るのかもしれない)、高齢者に限らぬ人々が誰からも見放されたまま孤独死していたり、また、2010年代には全国の空き家率が40%を超えて至るところがスラム化する予想されているような状況で、空間のあり方自体を変えなければならぬという漠然とした意識が自分にもありました。

元々存在していた消費社会や住まいや空間の問題が、震災を契機にさらにリアリティを増してきたというところだと思っておりますが、てらまっとさんが示した「不気味な空間に住むこと」を(ここが重要な

▼てらまっと「ツイントールの天使——キャラクター・救済・アレゴリー」『セカンドアフター Vol.1』2011年、85頁

▼「借りる、住まう、考える・拝借景と住むこと」『The Day After Yesterday』(http://shinano.jp/tenant/20110629/130936426)

レベッカ・ソルニット

「1061」

アメリカ出身のフリーランス・ジャーナリスト。地球温暖化や人権、政治などを題材に執筆。全米批評家協会賞、ラナン文学賞など受賞。主な著書に『災害ユートピア』のほか『暗闇のなかの希望』など。



キュアプロッサム×花見2.0

ころなのですが——。笑いながら、「学芸」というメッセージを受け取りつつ、自分の中でも「空間に働きかけて変容させたい」「住まっ方法を再創造したい」という欲求が高まっていたことが、『花見2・0』誕生の後押しになった気がします。

つらまつと

ありがたうございます。「借りる、住まっ、考える」は震災のすぐ後に書いた文章でしたから、思えばあの日から『花見2・0』をめぐるプレストがはじまっていたのかもしれないね。

コンセプトの話がだいぶ長くなってしまいました。結局、こうして生まれた「桜の名所をモバイルする」と「キャラクターを桜に見立てて花見をする」という二つのアイデアを一日目と二日目に分け、それぞれワケテカさんと僕とで担当するようなかたちになりました。実際に『花見2・0』をやってみて、ワケテカさんはどのような感想をもちましたか。

《花見2・0》とジャスミン革命

ワケテカ

『花見2・0』の前にその予行演習という感じで、自分とてらまつとさんとたけくらさんと六本木ヒルズで行われた六本木アートナイトというイベントに参加して、桜（つばいもの）を持って酒を飲みながらゲリラ花見をする『花見1・8〜六本木ゲームナイト』というのをやっただけですね。これが思いのほか会場にいた外国の方や女性に受けが良かったので（笑）、「これはいける！」と手応えを感じていました。

ところがいざ『花見2・0』決行の前日に、自分のTwitterアカウントが乗っ取りによって消滅するというアクシデントが起こってしまい、情報発信はほぼTwitterだけで行ってきただけに「もう駄目だー！」という思いで、一時は冗談ではなく『花見2・0』の実行を諦めかけていました。

それはともかく、てらまつとさんが事後に『花見2・0』をジャスミン革命になぞらえていたように、規模は違えど『花見2・0』は疑いようもなくSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）発のイベントです。まず計画段階からして、「Twitter経由で知り合った数人がなんとなく共謀し、その後もほとんどTwitter上でコンセプトやプランを練り上げていきました。実行当日は、何度かお会いしたことのある方だけでなく初めてのの方がTwitterを見て来てくださいました。その中には、原発事故後に福島から他県に避難した方、デザイナーの方、その他多くの方が含まれていて、皆さん各々花見アイテムを持ち寄って参加してくださいって、（てらまつとさん）さんのフォロワー数と影響力によるところが殆どとは言え」「こんなに色んな人に届くんだ」ということには驚きましたし素直に嬉しかったです。同時に、あらためてジャスミン革命を念頭に置きつつ振り返ってみると、——こう言うと言えは悪いかもしれませんが——SNSの持つ「動員力」を思い知りました。

つらまつと

『花見2・0』決行前日にワケテカさんのTwitterアカウントが消滅したときは、正直かなり焦りました。しかも一日目が無事に終わって、町家にある杉本さんのアトリエ「コンセント」で打ち上げの様子を撮影しているときに、新しく作ったアカウントまで乗っ取られてE5録画がすべて消滅するという…。いや笑いごとではないのですが、一日目の『花見2・0』が予想以上にスムーズに——とはいえ代々木公園でラジカセの持ち込みを止められたり、携帯の電波が途切れてたけくらさんと合流できなかったりもしましたが——進んだこともあって、ワケテカさんのアカウント消滅という予想外のハプニングは、いま考えるととても貴重な出来事だったのでないかと思えます。E5の映像に関しても、やすしさん（@DIII）が録画してくださっていたおかげで事なきを得たわけです。

むしろ僕が重要だと思えるのは、他人事のように申し訳ないですが、ワケテカさんのアカウントが乗っ取られたことで、『花見2・0』においてTwitterやUstreamが果たしていた役割の大きさを痛感したことです。それはネット経由でさまざまな方が参加してくれたというだけではなく、あるいはそれ以上に、『花見2・0』のコンセプトそのものに深く関係しています。またしてもコンセプトの話になってしまいますが、そもそも現実の場所を転々と移動するということは、ヴァーチャルなネットワークに支えられているからこそ可能になっているのではないのでしょうか。それは言い換えれば、ネット上に仮想的な「ホーム」があり、しかも持ち運ぶことができるということです。そしてこのことは、僕自身が昨年三月十一日に実感したこともあります。あの日、僕は新宿から自宅まで五時間ほどかけて歩いて帰ったのですが（正確には途中で力つきてマックで寝ました）、メールも電話もほとんど通じないなか、唯一まともな機能していたのがTwitterでした。そこにはいつもの見知ったアイコンが並んでいて、互いにリプライで励まし合い、非常に勇気づけられたことを覚えています。

もちろん被災地の過酷な状況に比べれば、せいぜい電車がストップした程度のことにはすぎません。けれどもリアルインフラが機能不全に陥ったとき、それに代わるインフラが生きているかどうかということが、とても重要な問題であることに気づかされました。



《花見1・8〜六本木ゲームナイト》



▼「たまと」 「喪失と希望の対位法」 『ほしのこえ』とエグザイルの詩学』 『セカンドアフター vol.2』 2012年 128-147頁

僕は最近「セカンドアフター vol.2」という同人誌に、新海誠の短篇SFアニメ『ほしのこえ』(2010年)についての文章を書かせてもらいました。よく知られているように、『ほしのこえ』は「宇宙と地上にひきざかれた恋人」のすれちがいや重なり合いを叙情的に描いた作品です。そこでは超長距離の携帯メールによるコミュニケーションのタイムラグが物語を駆動するわけですが、僕はこのアニメを《花見2・0》に、せむしには震災後のディアスポラ状況に引きつけて再解釈しています。僕の考えでは、『ほしのこえ』は移動し続けることを肯定する作品であり、文字通り携帯することで移動をエンパワーメントする「どこにでもある場所」としての携帯電話が大きな役割を果たしている。要するに、現実から切り離された「どこでもない場所」ユートピア」に逃避するのではなく、現実における移動のハードルを下げる装置として機能しているわけです。

いまやこうした傾向は、FacebookやTwitterとつづいたSNSの拡大や、iPhoneに代表されるスマートフォンの普及によりますます加速している。僕はそのことをポジティブにとらえています。ディアスポラを理想化することは決して許されませんが、とはいえず望まぬ移動を強いられたとき、どこにいてもつながることができるという事実は、移動にともなう心理的な負担をかなりの程度和らげてくれるように思うからです。つまり坂口さんのモバイルハウスに住むためには、「どこにでもある場所」としてのネット上のホームが必要不可欠なことですね。そうでなければ、人間は移動し続けることにはとても耐えられない。そのことはおそらく、佐々木友輔さんの「移動するトポフィリア」というアイデアにも関連しています。そして《花見2・0》はまさに、ディアスポラ状況にある未来の日本を先取りし、場所愛(トポフィリア)の象徴とも言うべき桜を移動可能にする試みでした。「桜のない場所で花見をする」というのは、ワケテカさんが指摘してくれたように、これまでの物理的なコミュニティの崩壊を想定していたわけですね。日本を物理的・地理的現実から切り離し、持ち運び可能なヴァーチャルなものに変えること——これが《花見2・0》の核心だったと言えるかもしれません。

他方でワケテカさんの言うように、SNSは動員のメディアでもあって、祭りを発生させる力をもっている。日本だと「飲酒運転なう」からはじまる炎上騒ぎばかりが目立ちますが、中東のジャスミン革命のように、場合によっては国家そのものを転覆することも不可能ではないわけです。とはいえ、さしあたって日本では革命する大義が見当たらないし、ジャスミン革命の火つけ役となった青年のように焼身自殺する勇氣もない。かといって明るくなきさそうな未来から目を背け、一時的な楽しみにふけるのも何だか気が引ける。そこでワケテカさんと《花見2・0》を執行し、ガソリンをかぶって火をつける代わりに、桜の着ぐるみならぬ「木ぐるみ」をかぶることにしたんですね。これは前日に東急ハンズで手に入れたもので、僕にとっては非常に高価だったんですが、代々木公園で女子大生サークルにキヤーカー言われたり、外国の金髪美女にプロポーズされたたりしたので(笑)、とても満足しています。いまから考えると、馬マスクをかぶって桜まみれで渋谷の通りを練り歩いていたワケテカさんも相当怪しい人ですね。よく職務質問されなかつたな、と思います。

面白きこともなき世を面白く——週末思想研究会の展望

ついでに

《花見2・0》企画段階では、最悪ワケテカさんと僕の二人だけでも実行する覚悟で、とか言っていました。一日目も二日目も本当にいろいろな方が来てくれて、ひとまず大成功だったと言えるのではないのでしょうか。こじょうさん(@kijou)がデザインしてくれた素敵なフライヤーとポスター、オガワデザインさん(@ogawad)の『一般意志2・0』ならぬ『花見2・0』のブックデザイン、トミーさん(@hashinonronka)の巨大ラジカセとリミックス、くあばらーさん(@kuapara)のキネクト花見ミク、コマダナオキさん(@nakomada)の『暇と退屈の倫理学』読書会すばんくさん(@SPANIK888)の《花見2・0 接続》などなど、当初考えていたよりずっと完成度の高いイベントに仕上がったように思います。差し入れもたくさん頂きました。とくに一日目は、通りすがりのおばちゃんや外国の方がおもしろがってくれたのも嬉しかったですね。下北沢ではわりとスルーされましたが、渋谷や代々木公園では何度も記念撮影を求められたような気がします。急遽泊まらせてもらった「コンセント」でも、大家さんから桜の切り枝を頂いたりしました。おかげで二日目の秋葉原公園では、喫煙所くらいしかない殺風景な空間をかなりゴージャスに書き換えられたのではないかと思います。Twitterでも「桜のない秋葉原公園で花見してる人たちがいる」というつぶやきをいくつか見かけました。一日目に問題視された「シェンダー」不均衡も、いくぶんか改善されましたしね。

ワケテカ

ソーシャルメディア発で公園を占拠、ということにこじつけて言うと、ウォール街近くの公園にデントを持ち込んで占拠した「Occupy Wall Street」なやつ——後で振り返るまで意識はしていませんでしたが「彷彿とさせますね。

てらまっとさんが言うように、「ネットを通じて生まれた人との繋がりが個人をエンパワーする」ということをこれほど実感させてくれる機会は今までありませんでした。確かに「自分たちだけでもやる」



桜の木ぐるみとモバイル桜の名所



花見2・0ブックデザイン



『暇と退屈の倫理学』読書会「花見2・0 接続

津田大介 [1973]
東京出身のジャーナリスト、メディア・アクティビスト。「Twitter 社論」新たなりアルタイム・ウェブの潮流（洋泉社、2009年）『動員の革命』ソーシャルメディアは何を変えたのか（中公新書ラクレ、2011年）

裏を返せば「誰もついて来ないだろう」と二期まで自分も思っていたのですが、実際に Twitter 上で《花見 2.0》の計画を発表してから様々な人の反応があった、それがもの凄くモチベーションに繋がりました。実行当日も、あれだけ人がついて来てこななければきっと「馬マスクを被って渋谷を練り歩く」などという暴挙には出られませんでした。「Twitter や Us」を通じて見られているということが、自分の行動を後押ししているという感覚がどこかありました。

津田大介さんが「動員の革命」で書いているように、誰かがバカをやっている時に、それを拡散したり呼吸したり追いかける人が出てきたり、バカをやっている人に追隨する二人目が現れたりして、バカげた振る舞いをムーブメントに押し上げてしまう所がソーシャルメディアの革新的なところでもありますよね。

もうひとつ、てらまっとさんが言った「ネットと場所」のことについて言うと、確かに桜のように場所愛を媒介するモノを持ち運ぶことやネットに接続することは、個人を包み込む環境（＝場所性）を持ち運び可能にし、過酷な移動にも耐えられるようにするという側面がある。それを震災を背景に取り上げて、ディアスポラの問題と絡めたのは卓見だと思います。

一方で、トミーさんの参加やすばんくさんの《花見 2.0 接続》に象徴的なように、地理的に離れていてそれまで関わらなかったような他者と「接続」してしまう所も、ソーシャルメディアの凄いところですね。自分もてらまっとさんと偶々 Twitter 経由で知り合っってこんな変なこと（笑）をやったように、個人をそれまでの生活圏や人間関係の外側に開いて連れ出してしまおうような力がある。それをあらためて実感しました。

震災のことについては、確かに、「たかだか電車が止まって一口かそこら帰宅できなかっただけの首都圏住民を難民に喩えるのは不謹慎だ」という見方もあるようですね。それに就いて言えば、《花見 2.0》みたいなユルいパフォーマンスとディアスポラの問題とを絡めるのも、「帰宅難民」の呼称以上に「不謹慎」なことなかもかもしれません。

しかし自分個人の実感としても、この一年余りの関東京において、あるいは旅先に身を置いて、内部被曝や更なる原発事故の脅威に思いを至らせ何度も「逃げるかどうか」で悩んだり、当時の周囲の人と移住を巡って議論したりしていました。海外の旅先では故郷喪失感に襲われて呆然したり、自分がそう遠くない未来に死ぬという感覚を強く持ったり、半減期が数万年という空間の放射性物質を後世に遺してしまふことについて考えて憂鬱な気分になったりもしました（Youtube にもアップロードされている一日の夜のコンセントでの話が妙に暗いのもそのためです）。でもだからこそ、それまでのようにただ漫然と生きるのをやめて、「面白きこともなき世を面白く」できたら、あるいは「何かを残した」という気持ちが高まったことが、原因となつてサロン構想から《花見 2.0》に繋がっていったのも事実なんです（こういうのを「やけっぱち」というのかもしれないが）。ただ、最近では《花見 2.0》でそれまで考えていたことを一応形にしてしまったことや、震災からある程度時間が経過してしまつたことで、なんとなくさういったヒリヒリした感覚が薄れてきてしまつていくけれどいいんだろ（うか？）と思つている今日この頃です。

ともあれ、最後は今後の《花見 2.0》と週末思想研究会の展望について語つて締めくくりましょう。まず、《花見 2.0》は来年もやるのか？これは来年になってみないとなんとも言えないところですが、もしやるなら今年以上にバージョンアップした花見がしたいですね。今のところなんとなく共有しているアイデアは、桜前線の移動に合わせて日本列島を西から東へ（あるいはそれに逆行して）、新幹線が何かに乗ってダイナミックに移動しようという案です。あとはてらまっとさんが NAVA の協力を得て宇宙に行くという話もありましたね。地球を離れるというのはある意味究極の故郷喪失体験だと思うので、これは是非とも実現させて欲しいところです。

他に週末研で現在構想中のものとして、てらまっとさんのつぶやきから始まつた盆踊りのアップデート（《盆踊り 2.0》）があります。これは元々《花見 2.0》の延長線上で、移動や場所、そこに身体の問題に接近するはずのものが、現在主に私のせいであらぬ方向へ議論が曲がってしまい、やや迷走中です。他にもちよつと方針で野宿をしてみようという計画や、《花見 2.0》をテーマに展示しようという計画、週末研の活動なのか微妙ですがてらまっとさんと進めている思想家トレーディングカードゲーム企画、移動式サロン、シャボン玉テロ、水鉄砲サバイバルゲームなどの構想があります。どれだけ本当に実現するかは分かりませんが、いずれにしても週末思想研究会は、これまで通り思いつきを武器に、その都度面白いと思うことをやっていけたらいいと思います。

てらまっと

今後もしいろいろな人を巻きこみながら、公序良俗に反しない範囲で週末的なイベントを積極的に企画していきたいですね。忙しいなか、どうもありがとうございます。

□プロフィール (Twitter アカウント)
□ワケテカ (@waketeka)
旅と本を愛する平凡な生活者。アカウント消滅パフォーマンスで衝撃のデビュー。週末研（週末思想研究会）研究員。新政府花見大臣。

□てらまっと (@teramat)
いまをときめく16歳。月に1回週末研（週末思想研究会）研究員・物書き。ニート。
『インテールの天使』キャラクター・救済・アレゴリー』『セカンドアフター vol.1』『2011年、85頁』、『喪失と希望の対位法』『ほしのこゝろ』とエンサイルの詩集『セカンドアフター vol.2』『2012年、128-141頁』、『多層化する世界―魔法少女とマルキエーリ』『リアリズム』『魔法少女のつくりかた』『2011年、55-88頁』など。人文系研究者支援ファンド設立のために「思想家トレーディングカードゲーム」企画。ブログ『The Day After Yesterday』(http://d.hatena.ne.jp/teramat/?t=1309361586)。誰か養ってください...



■「《盆踊り 2.0》のまとめ part1: ティアスポラ・郊外・ナリキエア」
(http://ogeter.com/hj/304063)

■「《盆踊り / 乱交 2.0》のまとめ」
(http://ogeter.com/hj/304126)

■「思想家カードゲーム本格始動!？」
(http://ogeter.com/hj/292343)

■「思想家カードゲームハッシュタグ (#しそく) まとめその二」
(http://ogeter.com/hj/300975)

topofil paper no.1

特集 | 花見 2.0

section 2

ブック・ガイド/アーカイブ・ガイド

てらまっと+ワクテカ

■ 坂口恭平『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』(太田出版、2010年)

震災後に週末研メンバーがこの本を読み影響を受けたことが、花見 2.0 の原動力の一つになったと言っても過言ではない。著者は河川敷のダンボールハウスに住む人々を「都市の幸」(＝消費社会の産む余剰)を使って暮らす「都市型狩猟採集生活」者と捉え、自明のものとされる生活様式を問い直し DIY 的に生活を再構築することを説く。モバイルハウス(移動式により土地代のかからない住居)というアイデアは勿論、公園等の公共空間も使う人の視点によって異なる階層(レイヤー)を現すという認識は、都市の風景を塗り替えようとする花見 2.0 のモチベーションに繋がっている。(ワクテカ)

■ 長谷川浩己、山崎亮 編著『つくること、つからないこと 町を面白くする 11 人の会話』(学芸出版社、2012年)

ランドスケープアーキテクトとコミュニティデザイナーの著者 2 人が、各分野で活躍する建築家や哲学者らと、これからの景観や空間における人と人の関係について語った刺激的な鼎談集。物理的な環境をセットすることに限らず、パフォーマンスや公園を使ったイベントといったアクティビティに新たな景観や関係構築の可能性を見出す議論は、桜の無い公園に新たな使用法を与え、リアルとバーチャルの結節点で人と人の交流する場所を作り出そうとした花見 2.0 の試みとシンクロする。(ワクテカ)

■ 『秒速 5 センチメートル』(2007年)

『ほしのこえ』(2002年)で鮮烈なデビューを飾ったアニメーション作家、新海誠の三作目の劇場公開作品。本作は「桜花抄」「コスモナウト」「秒速 5 センチメートル」の三篇からなる連作短篇アニメーションであり、思春期の少年少女の切なくも哀しい恋愛模様がノスタルジックに描かれる。過剰なまでに感傷的なモノログと残酷なまでに美しいデジタル映像とがひとつに溶け合い、日々の生活ですり減った視聴者の精神に破滅的な影響を及ぼす。タイトルの「秒速 5 センチメートル」とは桜の花びらが舞い落ちる速度であり、アキレスのように現在を微分する主人公タカキの生きる速度である。ありふれた日常とかけがえ

のない記憶が風景のなかで重なり合い、彼の眼前を次々と飛び去っていく。過去の呪縛からタカキを解放するのは、あの日と同じように降りしきる桜である。「タカキくんは、きっとこの先も大丈夫だと思う、ぜったい」一別れ際の祝福の言葉は彼の足を前に進め、踏切の先にある《花見 2.0》を勇気づける。(てらまっと)

■ 篠原雅武『空間のために 荒廃するスラム的世界の中で』(以文社、2011年)

都市社会学等が得意としてきた空間論的思考に依拠しながら、私達の周囲の空間(＝生活世界)の質に拘り抜き、資本の運動によって全面的に空間が荒廃していく(cf. マイク・デイヴィス『スラム化する惑星』)という前提に立った上で、ありうべき空間の方向性を示した本。アンリ・ルフェーブルを参照して語られる「人間が空間を生産する」という認識や、街路に浸潤する放埒な想像力の回復こそが来るべき空間のために必要だとする主張は、花見 2.0 に通じるものがある。(ワクテカ)

■ 『映画ハートキャッチプリキュア! 花の都でファッションショーさか…!?』(2010年)

女兒向けテレビアニメの金字塔とも言うべきプリキュアシリーズの第七作目『ハートキャッチプリキュア!』(2010～2011年)の劇場公開作品。主人公のつぼみとえりか、いつき、ゆりの四人は、正義の味方プリキュアに変身し、世界を砂漠化しようとする悪の組織に立ち向かう。本作ではファッションショーの準備のためにパリを訪れたつぼみたちが、謎の少年オリヴィエとの出会いをきっかけに、プリキュアへの復讐に燃えるサラマンダー男爵と対決する姿を描く。血のつながらない親子のすれちがいを軸に、親子とは何か、家族とは何かを問いかける感動的な物語であり、親子での観賞にふさわしい傑出したプリキュア映画に仕上がっている。自分を追放した世界を恨み、すべてを破壊しようとした孤独な男の魂は、ともに世界各地を放浪した少年の手のなかに故郷の安らぎを見出す。《花見 2.0》はパリを文字通り「花の都」に変えたプリキュアたちへのオマージュであり、故郷喪失者の旅路に寄り添う「一輪の花」である。(てらまっと)

■ 佐藤俊樹『桜が創った「日本」』(岩波新書、2005年)

桜にまつわる膨大な資料を鮮やかに読み解きながら、ソメイヨシノの起源の謎に迫る好著。著者はシステム論の専門家であり、ソメイヨシノの誕生が桜の意味やイメージそのものを書き換え、神話的な起源の物語を創出するプロセスをわかりやすく説明している。明治以降広まったソメイヨシノを日本古来の桜景色と誤解する見方も、あるいは逆にヤマザクラを伝統的な桜として持ち上げる見方も、ともにソメイヨシノという桜の理想像が作り上げた遠近法の内部にいる。ソメイヨシノと強固に結びついた「日本らしさ」や「自然/人工」図式は、しかし今日ではゆるやかにほどけつつある。《花見 2.0》は桜をめぐる説話の宇宙にあらためて介入し、境界の揺らぎを促進することで「日本」そのものを拡散しようとする試みである。(てらまっと)

□ 「4月7日・8日は「花見 2.0 ～モバイル桜の名所」

<http://togetter.com/li/276023>

□ 「《花見 2.0 ～モバイル桜の名所》一日目(4月7日)」

<http://togetter.com/li/286757>

□ 「《花見 2.0 ～モバイル桜の名所》二日目(4月8日)」

<http://togetter.com/li/288242>

□ 「《花見 2.0 ～モバイル桜の名所》タイムテーブル」

<http://tweetvite.com/event/ayh6>

□ 花見 2.0 画像まとめ

<http://hanami20.tumblr.com/>

□ 花見 2.0 プロモーションビデオ

<http://www.youtube.com/watch?v=KGFaN9CSdAw>

桜のない場所で花見をする。その滑稽さの裏側には常に、企画者二人の誠実で真摯な問題意識が感じられました。これは、「場所への愛」を掲げるトポフィルが発行するフリーペーパーの第一号を飾るのもっともふさわしいプロジェクトではないか。そう確信して原稿をご依頼しました。

《花見 2.0》の決行日、その場に立ち会った私が感じたのは、この滑稽な風景が滑稽でなくなる日が来るかもしれないということでした。道行く人が、この試みを笑うことができなくなるような日が来るかもしれない。それほど、故郷喪失は私たちにとって差し迫った問題となりつつあります。何も原発事故のような終末的事態だけを想定してのことではありません。日本という国が困窮し、インフラが維持できず都市が縮小していく中で、無数の小さな——しかし個人にとっては大きな——故郷喪失が起こるであろうこと。それは残念ながら避けがたい未来であるように思います。

場所愛は人それぞれに、それぞれ違うかたちで宿るものであり、社会改革や都市計画だけではカバーできずにこぼれ落ちてしまうものです。だからこそ、そうした状況で《花見 2.0》のようなささやかな試みが担う役割はとても大きなものになると、そう信じています。

トポフィル既刊本のご紹介



展覧会図録＋論考集

「floating view" 郊外" からうまれるアート」



作品写真集

「あなたはいま、まさに、ここにいる」

topofil paper no.1

特集 | 花見 2.0

2012年6月10日 公開

企画 佐々木友輔

協力 週末研 (てらまっと+ワクテカ)

編集 小田原のどか

発行 トポフィル

<http://www.topofil.info/>

topofil.info@gmail.com

トポフィル新刊本のご案内

刊行予定




展覧会図録

「floating view 2 トポフィリア・アップデート」



展覧会図録＋論考集

「KOSHIKI ART PROJECT」



topofil paper no.1
特集 | 花見 2.0

2012年6月10日 公開

企画 佐々木友輔
協力 週末研〈てらまっと+ワクテカ〉
編集 小田原のどか

発行 トポフィル
<http://www.topofil.info/>
topofil.info@gmail.com